

寄稿

2 和歌山で生活する人々の健康に貢献できる看護専門職の育成



東京医療保健大学 副学長
和歌山看護学部 学部長

八島 妙子

はじめに

和歌山県は少子高齢化・人口減少の進行に対し、長期人口ビジョンとして社会減を抑制し、自然減を減らすとして施策を展開している。社会増減の状況は15～19歳、20～24歳の若者層の転出が際立って多く、県内に大学が少なく県外の大学に進学するケースが多いため¹⁾とされ、東京医療保健大学和歌山看護学部新設もその一翼を担う。

また、高齢化に伴う課題として、医療や介護の需要が、さらに増加することが見込まれる。わが国ではその対応策として、医療は「病院完結型」から、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される「地域包括ケアシステム」に舵を切った。和歌山県においても同様に、本学部の新設は、多様な場で活躍できる看護師確保対策の意味も持つ。

そこで、本学部設立に至った経緯、使命を果たすために何ができるか、何を目指しているか、スタートして半年の活動も含めて述べてみたい。

1 本学部の設立の経緯と紹介

東京医療保健大学は、建学の精神「科学技術に基づく正確な医療保健の学問的教育・研究及び臨床活動」、「寛容で温かみのある人間性と生命に対する畏敬の念を尊重する精神」のもと、2005年に医療保健学部(看護学科・医療栄養学科・医療情報学科)として誕生した。2010年に東が丘看護学部(2014年に東が丘・立川看護学部に変更)の2学部になり、2018年に千葉看護学



雄湊キャンパス

部とともに和歌山看護学部の開設に至った。本大学は地域の中核医療機関と強力な連携により実習を展開し、授業や実習指導を病院の医師や看護師に担当していただくことで現場に即した学びを実現してきた。主な実習病院は、NTT東日本関東病院、国立病院機構東京医療センター、国立病院機構災害医療センター、JCHO船橋中央病院である。

和歌山看護学部は、県と市が中心市街地活性化のために3大学を誘致した第一号であり、日本赤十字社和歌山医療センター（以後、日赤和歌山医療センター）との連携により誕生した県下で看護学教育を行う2校目の大学である。伝統ある雄湊小学校校舎が和歌山看護学部雄湊キャンパスとして整備され1・2年次の主な学びの場として、3・4年次は日赤和歌山医療センターキャンパス（現・和歌山赤十字看護専門学校）で学ぶことになる。

1学年定員は90名であるが、平成30年度は104名の学生が入学した。そのうち100名が和歌山県下の学生である。大学の他学部のキャンパスと離れているが、東京医療保健大学の学生であるという自覚を持つ機会が設けられている。新入生合同合宿研修での全学新入生との交流、学友会活動、海外研修など大学全体の行事への参加である。海外研修の事前学習はインターネットを通じて双方向で参加者が画像を共有してコミュニケーションを持った。今後、無理なく全学での活動に参加できる環境が必要と考えている。

私立大学のために学生納付金は高額なことへの負担軽減として、スカラシップ制度、日赤和歌山医療センターを始め県下の病院からの奨学金制度でサポート体制を整え、学ぶ環境を支えている。また、アドバイザー制をとり小グループの学生を教員が担当し、学習や生活の相談にきめ細やかな対応を可能にしている。

取得可能な資格は全員が看護師国家試験受験資格、選択制であるが保健師国家試験受験資格、養護教諭1種、養護教諭2種、衛生管理者の申請ができる。

2 大学での看護学教育

看護師国家試験受験資格は3年以上の教育で得られる。

平成30年度の看護系大学は263大学276課程あり、看護教育施設全体の入学定員の34%にあたり、残りの66%は短期大学・専修学校・高等学校での教育である²⁾。和歌山県では大学2校の平成30年度入学定員は170名、専修学校と高等学校合わせて入学定員は380名³⁾である。

ではなぜ大学での教育なのか。

看護専門職の活動する場が拡大しており、多様な価値観をもつ看護の対象や連携・協働する職種の人々と関わることになる。そのために、幅広い視野で物事を考え、豊かな人間性を育むための基盤になる教養教育が重要となる。さらに、臨床推論力、在宅領域の教育の強化を図り、看護専門職として根拠をもとにした看護実践と、評価をもとに看護の質の向上に努めていく能力を育成しなければならない。そのために教養教育の充実と自ら学ぶことのできる環境を提供する必要がある。

大学設置基準第21条で、1単位の授業科目は45時間の学修を必要とする内容をもって構成す



実習室



実習風景

ることが標準と定められている。1単位の授業時間は15時間あるいは30時間と設定されていることが多いが、授業時間以外の必要な学習(予習・復習等)は授業時間以外の時間を当てるようにされ、十分な自己学習を促す仕組みがある。

一方、看護師国家試験受験資格を得るための教育機関は3年間に凝縮して組まれており、教養科目を組み込むことや多くの課題を課すことは困難といえる。看護専門職能団体である日本看護協会は看護基礎教育の4年制化の実現に取り組んでいる。その理由は、さまざまな情報を統合し、その上でタイムリーに判断・対応していく必要があるが、現在の看護師基礎教育の内容は、複雑な状況にある対象者を想定したものとはなっていないため、3年間の教育ではこれ以上の教育内容の追加は不可能と記されている。

3 和歌山看護学部の看護学教育

本学部は、地域を理解し、自ら考え地域社会の看護を創造しうる「地域」を支える看護専門職の育成を目指している。

カリキュラムは、一人の人間として成長できる学びの場を提供するために「豊かな人間性をはぐくむ分野」として、教養科目を充実している。さらに、「看護の基盤をつくる分野」「看護実践能力を高める分野」で学びを積み上げていく。特色として、和歌山の文化、地域の特性や生活する人々の理解を深め、和歌山の「人を支え、地域を支える」基盤をつくるために、1年次前期に「わかやま学」がある。和歌山県・和歌山市を幅広い視点から県知事・市長をはじめ、専門家からの講義を受けた。さらにグループ学習を通して理解を深め、自分たちの取り組むべき課題と何ができるかを明確化した。今後どのように学生が行動するかが楽しみである。さらに、日赤和歌山医療センターの看護専門職として就職した時のために、将来的には国際的な救護活動にも参加できるための科目も設置している。看護専門職の育成には実習教育が重要であ

る。日赤和歌山医療センターを始め、地域の多くの保健医療福祉施設の協力のもとに成り立っている。

この半年を、学生自身が大学生としての学び方を模索しながら学修に取り組んできた。夏季休業前には日赤和歌山医療センターでの実習も経験した。学修以外の大学生活も楽しんでいるようである。ボランティア活動も活発に行っており、11月に行われる医愛祭(大学祭)の準備も教職員の支援を受けながらも学生自身が希望する内容を設定して進めている。

後学期には、専門科目が入ってくるので、できるだけ学生の理解を促進し、学びを統合していけるように看護専門科目の教員で話し合っ

て授業内容を組立て、準備を整えた。これからも、学生の学修状況を確認しながら、教職員の協力体制のもと学習支援体制を整えていきたい。

そして、4年後には和歌山の人々の健康を支援する看護専門職として様々な場で活躍できる卒業生を送り出したいと考えている。

おわりに

本学部は、和歌山に根付いて、本大学の建学の精神のもと、赤十字の看護専門職としても活動しうる人材の育成を目指して教育を始めた。4年後に期待に沿える学生を送り出せるか不安であり、責任の重さを感じている。しかし、和歌山を愛し、教育に情熱を持つ教員が集まり、学生のやる気と伸びる力を信じて関わっている。職員も学生、教員と距離の近い関係で支えてくれている。今まさに、和歌山看護学部という新しい教育組織を創り出しているところである。学生の成長を地域住民に様々な形で支えていただき、地域で育てていただける学部でありたいと思っている。

現在は学部教育であるが、早い時期に大学院修士課程を設置し、広く社会で活躍している看護専門職はじめ他職種の方にも生涯学習の場を提供したいと計画している。

将来的には、他県の生徒からも選ばれる学部になり、さらに和歌山の保健医療福祉に貢献できるように進化し続けたいと考えている。

- 1) 和歌山県：わかやま長期人口ビジョン . 平成 27 年 6 月
- 2) 杉田由加里：文部科学省「看護系大学の現状と課題」. 平成 30 年 6 月
- 3) 和歌山県福祉保健部健康局医務課：看護の道 .4.5. 平成 30 年 3 月



わかやま学



ぶんだら節